

大震災から1年を迎え、数多くの特別番組を視聴して

大震災から1年を迎え、3/11の数日前からどのTV局も特別番組が多かった。

先に当HP記事「復興とは、悲劇を十字架として生きていく決意から（HP「雑学BN」の書籍等読後感関係（VI）、2011.12.23：参照）」で触れたように、「復興とはそこで起きた悲劇を受け入れ、それを一生涯十字架のように背負って生きていく決意を固めてはじめて進むものなのだ。」と知ったこともあり、あの日に起きた惨劇から目を逸らしてはいけないと思い、極力、3台のビデオにも特番を録っていたが、ようやく見終えた。

それだけに、津波画像の前に「ストレスを感じたり体調不良を感じた時は視聴を控えるように」との案内とテロップが、どの局のどの特番にも案内表示されることに違和感を感じつつ視聴した。

どの番組でも異口同音に云われるまでもなく、津波の映像を見ていて視聴を止めるかどうかは個人が判断すればいいこと。

一方でどの局のどの特番でも、「あの日を忘れてはならない、被災者のことを忘れてはならない、次世代に伝えなくてはならない。」としきりにコメントしながら、この視聴注意とのギャップはどういうことなのかと思った。

当然のことながら、押し寄せる津波を実体験していない我々は、映像を見たからといってあの惨劇の実態を理解できるものではないが、それでも理解したいという思いこそが、まず被災された方々に寄り添う出発点でないだろうか。

また、あの一瞬を理解しようと想うところから、次世代に伝えたい自分自身の言葉も見つかるのでないだろうか。

津波の来襲に遭遇した方々は、津波に飲み込まれ流される人を目にし、助けを求める人の声を聞いており、あの惨劇の十字架を背負って生きていかななくてはならないのであり、その心情に寄り添うためにせめて映像から目を逸らしてはならないと思うのだが…。

震災後全国的にしきりに云われた「絆」が如何に底の浅いものだったかは、瓦礫処理受け入れが全国的になかなか進まないことから分かる。

自分にとって不都合なことを避けることを助長するような案内やテロップを流す報道機関の中で、一つの番組でもいいから、「次世代に自らの言葉で語り伝えるために、津波の脅威の真実の映像から目を逸らさないでください。」とコメントする特番が欲しかった。